

生きる幸せをみつめる

いのちびと

いのちをバトンタッチする会



- 2 いのちの言葉
- 3 この人 ～玉置崇
- 6 心に響く「いのちの話」～細木佳子、岩村龍一
- 8 いのちの便り
- 9 私の思い ～中島健太郎
- 10 お知らせ
- 11 いのち いきいきコーナー 廣川正秋

No. 19
2018.1

良い教師になってほしい！ 笑いと涙に込める教師の一念



今日も、良き教師・良き学校づくりの思いを語ります（玉置ゼミにて）

落語教師？誕生

一九五六年、愛知県小牧市に生まれた。父は厳格な警察官で怖くて話せなかった。母は底抜けに明るく、松竹や吉本新喜劇と一緒にいつもテレビで観ていた。

「私の黄色の鼻水をみて母が言いました。『脳みそが出た。お前はもうだめだ』。何でも笑いにする母、それを信じる子どもでした」。

小学校三年生の授業中、「崇君、何かやってみて」と担任が言った。小咄をすると、「凄い！」と大褒め。「嬉しかったなあ。めっちゃくちゃ褒めてくれた。これで、人前で話すことが大好きになりました」。

小六で地元テレビのコントオーディションに応募。東海地区一位になった。中学・高校になると落語が大好きに。落語クラブに入部、名古屋の公開寄席に毎回通った。

「生の落語は違つんです。桂米朝に憧れました」。

もう一人憧れの人があった。ロングヘアの同級生、高根の花だった。ある日、奇跡？が起こった。

「私の数学の解答用紙が、偶然彼女に配られて返しに来てくれた。『玉置君は数学が出来るんだね』とチューリップの絵のメモ書きつ

きですよ。舞い上がって、数学が大好きに。実は、他の解答用紙はほぼ零点。あれを見られていたら、絶対数学はやってませんね」。

愛知教育大学数学科に進学。落語研究会に入部した。「いきなり真打ち噺の『火焰太鼓』を二十五分演じて、先輩に大ひんしゅくです」。

他大学落研との合同寄席なども企画して、在学中に二百五十六回も高座に上るといふ記録も作った。

教育実習で、「君は落研だから、子どもの前で毎日面白いことをやりなさい」と言われて、落語をしたが全く受けず「他の実習生は授業準備。私は、どうしたら受けるか、ネタばかりを考えていました」。

教員採用試験時、面接官に「落研やっているの？やってみて」と言われた。面接時間十分をオーバーして、三十分間、落語を続けた。誰も止めなかった…。

数週間後、採用合格通知が届いた。落語教師？が誕生した。

教師冥利の涙

小学校に赴任した。週一回のクラブ活動では、「古典芸能クラブ」を創設。小学生に落語や漫才、二

人羽織、大喜利などを教えた。その様子は、新聞や全国放送のテレビにも取り上げられた。授業では、わざと間違える・褒めてやるなど、落語の「ボケ・ツツコミ・間」を生かした授業づくりをした。

三年後、市内で一番荒れた中学校に赴任した。数学教師六名の内五名が辞めていた。生活指導も担った。「生徒は、私のやり方に拒否反応を示し、『玉置、死ぬ』と校門に落書きもされました」。

行き詰まりを感じて、小学校勤務時代を思い出して、授業中に笑いが起きるようにした。一人一人に気を配った。言葉のやり取りから、生徒の心をつかみ取るようにした。気持ちが変わらないときは、

「俺もお前が分からん。でもまた話そう」と気負わずに言った。すると、自分を慕ってくれる生徒がドンドン増えてきた。「玉置の授業は面白い」という言葉を耳にするようになった。

教師のあり方を全身で学んだ、未だに忘れられない出来事がある。ある日、助言者として研究授業に参加した。クラスには金髪の少年がいた。担任は腫れものに触るように声をかけなかった。授業後、

先輩助言者が言った。「お前は教師を辞めろ！どつして金髪の少年に一声もかけないんだ。『今日はよくやった』でもいい。生徒は自分なりにやるものだ。お前は、教師として生徒を見ていない」。

体と心が震えた。

「生徒は、先生が生徒とどう向き合っているかを見ている。先生が区別していると思われるはいけない。我が身を思い肝に銘じました」。

ある生徒がいた。育児放棄されて施設に入所。中学生になって家に引き取られた。毛虫を食べて友だちを驚かし、家出を繰り返していた。「行く所がないなら家に来い」と、独身だったこともあって自宅へ来るようにさせた。

「チャーハンを一人で作りました。生徒の母が急死。家に直ぐに戻れず、死に目に会えなかった。申し訳ないこともしました」。

生徒は、卒業して居酒屋に就職した。その年の十二月二十六日、少年は包丁をもって自宅を訪ねて来て言った。

「店長が刺身をさばいていいと言ってくれた。最初の刺身は、先生に食べてもらいたい。台所を貸してください」。

涙が溢れ出た。

「刺身を食べながら泣き続けました。教師冥利の涙でした」。

数年後、少年はバイク事故で亡くなった。

「子どもが恩師と考える教師とは、自分を大切にしてくれる先生です。教えてやるのではなく、一人に向き合うことが大切なんです」。

みんな輝く学校づくり

愛知教育大学附属中学校に異動となった。研究校である。世に出ている算数と数学の教育書は全部読み尽くしたと言っているほど、研究と実践に没頭した。

「生徒が『面白い・楽しい』授業づくりを、どんどん公開して追究しました。それが今も蓄えになっています」。

嘱望されて愛知県教育委員会に赴任した。五十三歳の時、体調に異変が起こった。胸やけがする、食べたものが逆流。朝起きると、

パジャマが嘔吐物でいっぱい。原因不明で、血圧を下げる薬を気休め？に飲み続けるしかなかった。寝不足と不安が重なり、「もう働け



若き日の学校現場で

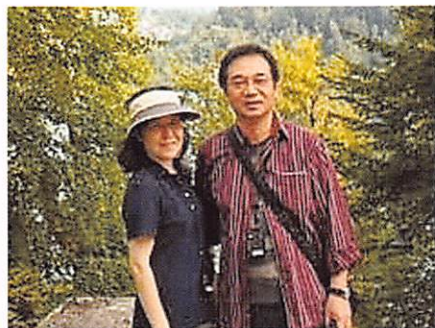
ないと覚悟もしました」。

奥様の潤子さんが、ネットである患者のブログを発見。症状がそっくりだった。直ぐにブログに書かれていた横浜にある昭和大学病院を訪ねた。病名は食道アカラシア。食道の筋力が衰える病気で、十万人に一人が発症した。標準治療は未確立で、十数例目となる治療手術を受けた。

「手術は成功。退院するときに『いのちを大切に。死ぬなら食道以外で』と主治医が笑顔で言われました。涙がホロリ。入院中、厳しい病状の患者さんとも同室になりました。第二の人生をもらった、心底感謝しました」。

その後、県教育事務所長を経て小牧市立小牧中学校長に赴任。

『鍛える学び合つ学び』のテーマのもとに、生徒も教師も学びを『満契』できる学校づくりに取り組ん



奥様・潤子さんと欧州旅行

だ。新しいことを始めるよ！戦略会議、親子で学ぶ夜の小牧中学校、PTAサロン、愛マッププロジェクト、学校ホームページの積極発信……。また、緊急呼出しに備えて自宅では禁酒を貫いた。生徒には笑顔で接した。

「学校が楽しい、面白い。みんながそう思ってくれる学校こそ、みんな輝く学校です」。

その斬新で魅力的な学校づくりは、名物校長・学校と授業づくりの達人として、全国に知られるようになっていった。

教育と笑い

二〇一五年、定年二年前に退職し、岐阜聖徳学園大学教育学部教授となった。

「今、新任教師の約十%以上が辞

める時代です。若い教師を育てる、それも道だと思いました」。

その教育は、玉置流教師道の伝授である。玉置ゼミは、学内で人氣ゼミとなっている。

「まず教師として基礎力をつける。発問、指示、声掛け、教材研究、集団をまとめる力など。良い教師となるために、子どもひとり一人を観る、語る、伸ばすことを根っこに持つてほしいのです」。

「教育と笑いの会」を立ち上げた。教育者自身が、教育を課題にして、漫談・漫才・落語・大喜利など行つものだ。愛知発で、東京・北海道・福岡にも広がっている。

「教育界は元気がない、何かに怖気づいているようです。笑いは困難な時代を生き抜く糧になる。笑いを届けながら、教育現場での笑いの効用や、話術を磨く大切さも発信します。『いろいろなけど明日も頑張ろう』と元気になってほしいですね」。

また、中堅若手落語家を地元で招き「小牧寄席」を三十年も主催。愛狂亭三楽の芸名で、敬老会などの高座で自らも笑いを届けている。

「教育と笑いはいわゆるワークです。人生、明るく楽しくです！」。

良い教師を育てる

現在、全国から講演や授業指導依頼が殺到している。テーマは、学校経営、授業づくり、数学教育、地域やPTA連携、情報教育など多岐にわたる。著書も二十七冊となり、落語家との共著もある。

今回のインタビューで、いのちや人生の幸せについても聞いた。

「いのちとは、本当に大切なものですよね。だからこそ、自分のいのちは人のために役立つようにしなければと思います」

「生きる幸せとは、自分が仕掛けたことで、みんなが喜んでくれること。『玉置と出会えて良かった』と言ってもらえたら最高ですね」。

家族についても尋ねた。

「家内とは、中学校で知り合った職場結婚です。両親と同居して、家のことは全部妻任せでした。附属中勤務時代は、研究室に何泊もして帰りませんでした」。

『教師として素晴らしいけれど、夫としては……』と言つてしまうね。

最近では、二人で旅行もしています。家内のおかげと感謝です」と、すっかり大反省の様子でした。

教師とは何か？と聞くと、二人

の教師のことを話してくれた。

「社会科授業名人の有田和正先生の授業を見る会を企画しました。開始十五分前になつても到着されない。直前に来場すると、重病で倒れんばかりの最悪の体調。でも登壇するや感動の連続でした。それが最後の授業になりました。教師としての生き様に震えました」。

「三十数年追っかけている先生が、野口芳宏先生です。『実感・本音・我がハート』という生き方にあこがれています。八十歳を超えても、全国各地で講演されて多くの教師の心を打つからです」。

そして、凜と続けた。

「教師は、人の人生に影響を及ぼせる人です。こんな素晴らしい仕事はありません」。

私と関わる人が「良い教師になつてほしい」。その思いが無くなつたら、私は教師を辞めます」。

最後に、満面の笑顔で一席。

「インタビューの“オチ”、楽しみにしています。では、お時間もよろしいようです」。

玉置崇（たまおきたかし）。岐阜聖徳学園大学教授。小中学校、文部教育、教育委員会など一途に教育に携わる。落語歴四十年以上。多くの教育研究会を主宰し、教育への熱き思いを笑いに共に全国に発信する。